

# 「りぼん」投稿時代のさくらももこ・矢沢あい・吉住渉

信時哲郎

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科)

## はじめに

「あなたは「りぼん」派、「なかよし」派?」。漫画好きの少女たちは、必ず聞かれたものだ。しかし90年代には売り上げが240万部を越えたとも言われる「りぼん」(集英社)も、今や15万部を下回る。「なかよし」(講談社)も90年代には200万部を越えたのに、今は8万台に留まる。<sup>1</sup>

90年代には「なかよし」に『美少女戦士セーラームーン』があり、「りぼん」には『ちびまる子ちゃん』『天使なんかじゃない』『ママレード・ボーイ』が連載されていた。同じ頃に「少年ジャンプ」が600万部を売っていたことを思えば、それだけ団塊ジュニア層の子どもが多かったということなのかもしれないが、優れた作家による、優れた作品が頻出していたということも影響していよう。

本稿では、この「りぼん」黄金時代に作品を連載していたさくらももこ、矢沢あい、吉住渉について、「りぼんNEW漫画スクール」を中心に、彼女たちの投稿作品に対する編集部や先輩作家からの評価やコメントを甲南女子大学文学部メディア表現学科の「少女マンガ雑誌コレクション」所蔵の「りぼん」バックナンバーを参照しながら、デビューに向けて、彼女らがどのように成長を遂げていったかを見ていくことにしたい。

## さくらももこ

2018年8月、さくらももこが53歳にして死去したニュースはショッキングであった(1965年5月生まれ)。が、その際に多く出回った追悼ニュースの中に、さくらが矢沢あいとライバル心を持っていた、というものに目を止めた人もいたかと思う。

矢沢はさくらの1学年下(1967年3月生まれ)。作風も方向性もまるで異なっているが、漫画版『ひとりずもう』(「ビッグコミックスピリッツ」2006年-2007年 不定期連載。2007年4月・集英社)には、「あつ、/矢沢あいも/また入賞してるっ!!」「相変わらず/うまいなア…/きつともうすぐ/デビューするね。」「いつの日か/矢沢あいと/会えるといいな。」「矢沢あいぐらい/うまくないと、/少女漫画って/ムリなんだ……」「あーあ…/なりたかったな。/なりた/かったな…」などと、矢沢あいへのライバル心や嫉妬心というより、憧れに近いももこの気持ちが綴られている(引用に際しては原則としてルビは振らない。これ以降も同じ)。

「りぼんオリジナル」(1987年秋の号)に掲載された「夢の音色」でも、「あー今月は/矢沢あい投稿してるー/うまいなーこの子/デビューするだろうなア/わたしもがんばろっ」とあり、出典は未確認ながらもwikipediaの「矢沢あい」の項目には「『ちびまる子ちゃん』の作者さくらももこは、女性週刊誌に掲載された読者の質問コーナーで、「ライバルの漫画家はいますか」という質問に対し、ライバルではないが気になっている漫画家として矢沢の名前を挙げた。」ともある(最終アクセス 2019. 3. 3)。

注目すべきは、『ひとりずもう』では、ももこの姉にも「ちょっと、/今月の漫画スクールの/「もうひと息賞」の/矢沢あいっていう子、/うまいねっ。」と言わせていることである。実際のとおりなのかどうかは分からないが、「りぼん」の漫画スクールが同時期に投稿していた漫画家志望の少女たちではなく、一般の読者までが、きちんとこのコーナーを読んでいたことを示す(少なくとも不自然でないと思われていた)からだ。

<sup>1</sup> 一般財団法人日本雑誌協会 (<https://www.j-magazine.or.jp/> 最終アクセス 2019. 3. 3) の2018年10月から12月までのデータによる。

「夢の音色」によると、さくらももこの初投稿は高校2年の春休みに描いた「正統派の少女マンガ」だとのことであるが、「きはら先生の表紙」の7月号（高校3年次であることから1983年7月）に、Bクラスとして「さくらももこ」の名前が出たという。「りぼん」の当該号を探してみると、たしかに表紙は樹原ちさとによるものだったが、さくらももこの名前は見つからなかった。ただし、小説版『ひとりずもう』（2005年8月・小学館）によれば「まだ『さくらももこ』というペンネームを思いついていなかったので、違うペンネームを書いた。ごくありふれた女の名前にしたと思うが、忘れた。」のだという。

さくらももこは、この結果に愕然とするが、或る時、短大の国文科を志望するために「わたしの好きなことば」というテーマで作文のテストを受けることになる。そのとき「おもしろおかしく書きちゃえ」と思って書いたものが、「書き流したエッセイ調の文体が高校生とは思えない」「現代の清少納言」と、激賞されたことから気をよくして、自分の方向性をエッセイ漫画にすることに決めのたという。

※

そして初のエッセイ漫画である「きらきら絵日記」（16枚）は、めでたく1984年11月号（169回）の「りぼん」にて「もうひと息賞」を受賞している。編集部のコメントは次の通り。

〔評〕昔はやった遊びやお菓子やTV番組について思い出すと、何かすごくやさしい気持ちに包まれるでしょ。そんな気分を漫画にしたのが、この作品である。あの頃の思い出の品々を、作者は愛情のこもった語り口で紹介、解説している。その表現の仕方に作者の感受性の豊かさが感じられる。ちょっとしたユーモアもある。絵はうまくないが味がある。丁寧に描いてあるのもいい。

課題としては、この水準で様々な題材をエッセイ風に料理できるかである。次の作品を期待している。がんばれ。

総合得点は59点。投稿作のイラストの下部には「↑ついにスクールにもエッセイ漫画が登場だ。次回は10枚くらいでまとめてみよう。」とある。さくらの漫画「夢の音色」では、掲載月もピッタリとあっているが、さすがに表紙の絵はまるで異なって再現されている。編集部のコメントも再現されており、ピッタリ同じ、とは言えないものの、おおよそのニュアンスどおりに書かれている（漫画の中に文字が書かれているので、文章が終わらないままに行換えされている）。

〔評〕むかしのことやなつ／なにかとてもやさし／そういう気分を漫／絵はうまくはな／ももこクンのこれ／色々な題材を／できるかというこ／次回も期待して／がんばれ。

手元に残っていたのか、あるいは編集部などでバックナンバーを確認して書いたのかは判断できないが、心に残るコメントだったのであろう。

※

次の投稿は1985年1月号（171回）の「今日は何の日」（10枚）。またしても総合得点59点で「もうひと息賞」である。編集部のコメントは下記のとおりである。

〔評〕169回の「きらきら絵日記」（もうひと息賞受賞）で幼い頃の思い出を綴ったももこ君が今度は1年12か月を漫画にした。ほのぼのタッチのユーモアはますます良くなった。オイルショックの紙不足でマラソン大会の賞状が7位までしか出ないとか。（例年は10位まで出た）父親にまむしドリンクをおくるなどが、特に傑作だった。絵もあいかわらずかわいい。しかし、1年を12か月にただ順番に描くというのは、あまりに芸がない。一貫したストーリー性がほしかった。漫画センスが大変あるので、カタログ漫画にこだわらずに、

10～12枚位くらいの生活・家庭漫画を描いたらどうだろう。挑戦して下さい。

また、投稿作のイラスト下部には「↑ネームを「描き文字」で書くのは感心しない。鉛筆で書こう。ももこ君、次作を期待してますよ!!」とあった。前回の受賞時に「10枚くらいでまとめてみよう」とあったコメントには素直に従ったが、必ずしも編集部の反応はよくなかったようだ。「ますます良くなった」とコメントがあるわりに、59点は全く変わっていない。

※

次号（1985年2月号・172回）には努力賞（賞金5万円）として「教えてやるんだ ありがたく思え」（10枚）が載っている。さくらもこのデビュー作となったものだ（デビュー作では「教えてやるんだ」と「ありがたく」の間にスペースはなく、末尾には「！」が付いている）。

〔評〕ももこ作品は粗筋の書けるお話でないので、今回も批評だけを書く。今回の主題<sup>テーマ</sup>は学校の先生です。様々なタイプの先生をおもしろおかしく描き分けてくれました。生徒をバカよばわりする先生。演説の長い先生。気の合う先生など。読み手が自分の思い出の先生と重ね合わせることができ、実に楽しく読めた。9人の先生を描いているけれどどれも大変ユニーク。ももこ君の人間観察の能力にただただ脱帽しました。漫画の主題は何かと問われれば、その答は「人間」である。ももこ君はその「人間」が描けるのだ。素晴らしい才能です。

作品全体に流れるほのぼのとしたユーモアは、さらに磨きがかかった。先生一人一人のエピソードに小さな落ちをつける構成もうまい。

キャラ、ユーモアセンス、構成力と三拍子そろっている。次回は短いユーモア・ストーリーに挑戦して下さい。

絵は素朴で魅力的だが、スマートさもほしい。何度も何度も練習して、より魅力的な絵を作り出してください。ガンバレ。

問題点は指摘しながらも、ほぼ絶賛のコメントであり、さくらももこ作品全体をコメントしているかのような暖かいものであるように感じられる。総合得点は66点。投稿作のイラスト下部には「↑吹き出しの形がわるい。これでは写植が入らない。ペンタッチをきれいにしよう。」とのコメント。

※

次に掲載されているのは1985年6月号（176回）。「赤い金魚」（12枚）である。「りぼんNEW漫画スクール」の冒頭には、「シーズンベスト賞はまたもや該当作なしであった。なんたることだ。諸君がんばらなアカンヨ。ホンマニ。」とあり、果たしてさくらももこ作品は総合得点57点で、前回よりも下がっている。ただ、単なる「もうひと息賞」ではなく、「期待賞1万円を加算」とあった。

●ももこはお祭が大好きです。夜店のおもちゃは何でもおもしろく、夜店の食べ物は何でもおいしそうに思えるのです。今日は水神さんのお祭。ももこは姉さんと300円握りしめて出かけました。ひよこを買って、金魚すくいをして…!?

〔評〕ももこ君久々の登場。ノスタルジックでほのぼのとした作風は、今回も楽しめた。しかし、174回の批評で我々が注文した「ユーモアストーリーに挑戦を！」は今回は果たせなかったようである

お風呂から始まるイントロ、独特の語り口ともうまい。人間観察＝キャラ作りも相変わらずの鋭さである。金魚すくいの必勝テクニックについて、ウンチクをかたむけるくんだりも、ももこ君ならではの世界である。エッセイ漫画としてはまあまあの完成度である。が、エッセイ漫画ではすぐにお話のタネがつきてしま

う。ユーモアストーリー（ギャグ漫画）に挑戦しようではないか。体験からアイデアがひらめいたら、そこから飛躍してイメージを広げ、漫画的フィクションを描いてほしいのだ。想像の世界に入ってほしいのだ。そのためには、キャラに工夫が必要。

漫画的主人公を作って、体験を超えることです。ガンバ。

投稿作の右側に「←人間観察の鋭さと、今後の成長に期待して、期待賞とした。」とあり、下部に「↑ギャグ漫画は主人公のキャラが命。既成のギャグ漫画の主人公たちを徹底分析して、キャラ作りの参考にしよう。」とある。批評は的確であるように思うが、編集部は、まだまださくらももこの「思い出」の引き出しがどれだけ広く深いか気づいてないようだ。しかし『ちびまる子ちゃん』も巻数が10を越える頃には、さすがにネタも尽き、新しいキャラを毎回投入して、エッセイ漫画・思い出漫画からキャラ漫画、キャラ・ギャグ漫画に作風を変え、現実世界を遥かに超えた架空世界の漫画『コジコジ』を描くことになっていることを思えば、編集部の、この時の心配も、全くの杞憂であったとも言えないことになる。さすがは多くの漫画家を見てきたプロ。なお編集部コメントに「174回」とあったのは「172回」の誤り。

※

1985年8月号（178回）では「神様の休日」（12枚）が、総合得点66点で、2度目の努力賞（賞金5万円）を取っている。

●「年に1回や2回、自分を守ってくれている神様がどっかに行ってしまったんじゃないかと思うほど、ムチャクチャ運のない日がある」…という作者のメッセージに即して語られる、ももこ君の悲運な1日のお話。

〔評〕私たち編集部は「ももこ作品」について、今回改めて考えてみました。その結論であります。

私たちは、ももこ作品を今までに7編読んだ。どれも心なごむ、ももこ君独自の世界であった。ストーリーギャグ漫画とはスタイルも、狙いも、趣も異にしているが、まぎれもない、ももこ君ならではの漫画世界である。言葉をあてはめれば、エッセイ風漫画といえる。ももこ君の作家的資質も、エッセイ風漫画に適しているようである。

既成作品の枠にあてはめては新しいスタイルは生まれてこない。ストーリーギャグを勧めた176回の批評を撤回します。ももこ君、エッセイ風漫画を完成させて下さい。スクールは開拓者をバックアップします。ガンバ。

ストーリーギャグを編集部から勧められながらも（172回）、無視してエッセイ漫画を投稿（176回）。あらためてストーリーギャグを勧められながらも、応募作はまたエッセイ漫画（178回）。しかも、その回に努力賞に入賞というのは、さくらももこの精神的なタフさ（頑固さ）を感じさせられる。そして、編集部も考えに考えたあげく、176回のコメントを撤回し、19歳の投稿者の主張を認めるというのだから、なかなか思い切った方向転換であるように思う。さくらを開拓者として称揚するというのは素晴らしい決断だったと思う。

なお、投稿作品の右側に「←絵に進歩がないぞ。がんばってほしい。」とのコメントがあった。

※

そして1985年9月号（179回）ではシーズン・ベスト賞2編のうちの1編となり、さくらももこは、次のようなコメントを書いている。「★小さい頃からの夢だったので／大変うれしいです／がんばりますので／よろしく願います／月並みな挨拶だ!!」。小説版『ひとりずもう』によれば、「エッセイ漫画を思いついてからちょうど一年後の七月十三日の金曜日の夜、電話がかか」り、「おめでとうございます、デビューが決まりましたよ」と言われた、とのことである。

一緒にS・B賞を取った水野はせをは「あの日見た青空」（177回努力賞）で受賞しているが、さくらの場合

の受賞作品は複数で、次のようになっている。「★『教えてやるんだ ありがたく思え』（172回努力賞）『まだ若いのに…』（189回佳作）」などの、一連のももこ作品」。受賞作に複数の漫画が載るといのは、あまりないことだと思う。つまり新しいジャンルとしてのエッセイ漫画を、編集部の方もすんなりと認めるわけにはいかなかったということなのであろう。

今号で佳作を取ったのは「まだ若いのに…」（11枚）。佳作（賞金10万円）となっており、総合得点は73点であった。

〔評〕 短い作品なので粗筋は省略

ついに、ももこ君が佳作である。<sup>シーズンベスト</sup>S・B賞である。プロとして旅立つ君に、はなむけとして厳しい批評を書く。

今回もキャラは秀逸であった特にスカハリ君は摩訶不思議なおかしさを持っていた。ネームも相変わらずシャープ。しかし絵は進歩していない。人物の描き分けがもうひとつ完璧でない

変人4人の描き分けはできているがまっとうな生徒たちとの「顔の差」がなかった。脇役も手を抜かずにしっかり描くこと。

ももこ君の絵には、絵の面での発見が少ないのだ。（ああ我ながら厳しい言葉だ）ヘタでもいいから、この絵おもしろい。この顔のシワの入れ方ババクサイ。この表情スケベそう。このうどんのシコシコ、クネクネした感じ食欲をそそる一。<sup>など</sup>等の表現がほしかった。

ももこ君、人間、動物、ラーメン、盆栽など、なんでも良いから徹底的にスケッチしてごらん。クロッキーブックを持ち歩くこと。スケッチする時は全体だけでなく細部も観察すると、意外な発見があると思う。構図やデザイン的処理でも気のきいた所がほしかった。工夫してほしい。

絵の勉強のために大人のコマ漫画を研究して下さい。ナウイ人間を漫画的に描いて、ももこ君の手持ちのキャラにしてほしい。趣味性に走らずに、ポピュラリティのある作家になってほしい。

ギャンバローっ!!

さくら作品へのコメントには、「ガンバ」「ガンバレ」が多いが、最後も「ギャンバロー」であり、編集部ともども、新しい領域に踏み出すことを共に確認し合っているかのようによく読めてくる。ただ、さくらももこが画力を身に付けたのかというと、そういうわけでもなさそうだ。この画力についても、エッセイ漫画としてのネタが尽き始めた『ちびまる子ちゃん』の10巻頃から、コマから溢れそうだった文字も控えめになり、逆に絵柄が人物にしても背景にしても手間がかかっており、きれいになっていることを思えば、やはり編集部は先のことを見通していたのだな、と思わされる。

※

さくらももこのデビューは「教えてやるんだありがたく思え!」（「りぼんオリジナル」1984年冬の号）。単行本の『ちびまる子ちゃん1』（1987年7月）にも掲載されているが、その前に『「りぼん」新人まんが傑作集【3】 虹を渡る7人』（1985年3月）にも掲載されている。編者は一条ゆかりとなっており、巻末の作品解説には、一条によるなかなか辛辣なコメントが掲載されている。ただ、考えてみたいのは、新人に優しい言葉をかけない一条が狭量だなどということではなく、解説の冒頭に述べられた漫画家としての複雑な心境である。自らが次なるライバルを育て、自分を漫画界から追い出す予備軍を作らなければいけないのだから、これはなかなかシンドイ仕事である。

私の気持ちは複雑なんだ。まったく、なんだってこう次から次へと新人がデビューするんだよ。おまけにどいつもこいつも、私には縁のないフレッシュさでピチピチしててさ。

う…うらやましい……。買えるものなら売って欲しい！

若さのパワーなんて、あたり前だけど若くなきゃできないもんね。

絵が下手だろうが、話がギクシャクしてようが、そんなもんはたいしたこっちゃないんだ。

絵なんか描いて描いて描きたおせば、必ずうまくなるし、話だってそうなんだから。今より悪くなるってことは絶対ないんだ。彼女たちには明るい未来が待っているかと思うと、お姉さんはついひがんでしまうんだ。

昔、私も新人で、ひょっとしてそのころの先輩たちにこんな思いをさせたのかなあって思うと、しかたない気もするけど、しかたないですますほど、私は人間ができてないんだ。こうやって解説をおおせつかったのもなにかの縁。

私は〔2〕の解説の太刀掛さんのように優しくはないよ。

バンバン欠点を指摘しやるんだ。それでめげて田舎に帰ればしめたもの。くそお、今に見てると発奮すればそれはそれでしめたもの。麦も踏まなきゃ育たない。

踏みたおして芽がでないってことも、あるかもしれないけど、そんなのは私のせいじゃない。麦に根性がなかっただけだ。そんじゃ、麦踏みいきまーす。

そんな一条の、さくらももこに対する批評は次のようなものである。

で、「さくらももこ」さんかというと、あきれたというか、おみそれしましたというか、こういう人を選んだ「りぼん」はえらいですよ、小学生でも描けそうだと思う絵に、常識を超えたストーリー。こういうのをうまへたっていうんだろうなあ。本人もさぞや変な女なんだろうなと思ってしまう。この汚くて下手な絵が妙におかしくて、なにかこのまま下手でいてほしいって思う。ももこさん、あんたはえらい。このままかってに暴走してください。くれぐれもうまくならないように。

毒のあるコメントだが、編集部のコメントよりも、逆説的にさくら作品を最大限に評価し、エールを送っているようにも思える。

※

最後にさくら作品がどのように得点が付けられていたかを振り返ってみたい。

タイトル	絵			ストーリー			センス	総合
	キャラ <sub>1</sub>	構図	表現力	キャラ <sub>2</sub>	ネーム	ストー <sub>3</sub>		
きらきら絵日記	5	5	4	6	7	5	27	59
今日は何の日？	5	5	4	6	7	5	27	59
教えてやるんだ ありがたく思え	5	4	5	7	7	5	33	66
赤い金魚	5	5	4	5	6	5	27	57
神様の休日	5	5	4	6	7	5	34	66
まだ若いのに…	5	5	5	8	7	7	36	73

1 キャラクターの顔等の魅力, 2 キャラクターの性格等の魅力, 3 ストーリー

絵に関しては、最後まで上がることはなかったが、キャラクターの性格、センスは、もともと高かったものが、だんだん高くなっている。ただ、編集部は最後まで思い出エッセイへの不安を持ち続けたようで、摩訶不思議な変な人間を出せ、絵を上手に、と主張し続けているようだ。さくらももこの持ち味は、『天才バカボン』の登場人物であるバカ田大学の卒業生のような奇人変人を登場させることではなく、なんの変哲もない地方都

市の日常生活の中に、よくよく見てみると変なことがたくさんある、おかしい人たちがおかしいことをやっている… という発見の面白さだろうと思う。編集部のコメントを、うけながしたのか、それともうまく対応できなかったのかは分からないが、さくらももこは、こうして「りぼん」の人気漫画家として育ち、「りぼん」黄金期を築くことになった。

## 矢沢あい

さくらももこが、矢沢のことを意識していたということは先に述べたとおりだが、漫画版『ひとりずもう』の「おまけ ももこのこぼれ話」には、次のように書かれている（手書き文字なので、スペースが空いているところは一文字分のスペースを空けた）。

矢沢あいは、みなさんご存知のとおり、大人気マンガ『NANA』の作者なのですが、実際ホントに私と同じ時期に『りぼん』に投稿していたので、むこうも「さくらももこもがんばってるなあ」と思っていたそうです。同じ頃 投稿していて、毎月お互いに同じページでよく見かけたので、いつか会いたいなあという想いがありました。

それで、私も矢沢あいも ほぼ同時期にめでたくデビューし、りぼんのパーティーで初めて会ったのですが、なんか初めて会った気がしませんでした。矢沢あいも、私を見るなり「さくらももこってひと目でわかるなあ。絵とそっくりやん」といって笑いました。矢沢あいも、わりと絵に似たところはあるのですが、性格はサバサバして面白くていいヤツです。だから、漫画のロマンチックな感じとはやや違うのでホッとしたよ。でも、根はきっとロマンチストなんでしょうね。あいちゃんは、すごくまじめにいてねいに漫画に取り組む作家なので、立派だなあと思います。

…まあ、私も一応まじめにやってますので、ちょっとよろしく。

しかし、作風の違いにもよるのだろうが、矢沢の方は、後述する吉住渉の方とより仲が良かったようで、お互いのコミックスにも頻出し、『矢沢あいイラスト集 天使なんかじゃない』（集英社・1994年10月）には「あいと渉のラブラブ(?)対談」（以降、「ラブラブ対談」）も掲載されている。

矢沢が漫画家を目指すきっかけについては、「ラブラブ対談」で、こう語っている。

マンガが好きやったからってのはあるんやけど、私はもともと、絵をかくことも、詩を書くことも、文章を書くことも、とにかく想像が広がるようなことがすごく好きやったから、ただ、小説家っていうと、なんか雲の上って感じで、ぜーったい無理やなって。頭、悪いしー（笑）。でもマンガなら、絵もかけるし、話も作れるし、演出的なことも自分でできるし、好きなことがいろいろ入ってて、おいしいなって、自分の欲求が全部満たせるなって。

「りぼん」での投稿は、確認出来る限り7回だが、「らぶらぶ対談」によれば「実は10回投稿してるんです私。努力の人。下積み長いねん（笑）。それで10回も投稿してると、もう最後のほうはほとんど意地になってて、デビューせなシャレになれへんっていうか、自分でも引き下がれんようになってがんばった。だから高校時代は、夜中はマンガかいてたし、“勉強”っていう二文字はなかったなあ（笑）」とのこと。「中1か中2の時に『りぼん』に初めて投稿して、Cクラスに入って、最低のクラスやねんけど（笑）。…で、本格的に投稿するようになったんは、高校に入ってから。」だという。ただ、「りぼん」のバックナンバーをあたってみても、矢沢あいの名前、またそれに類似した名前も見つけることができなかった。見落としている可能性もあるが、おそらくペンネームが違っていたのだろう。

※

最初に「もうひと息賞」を受賞したのは1983年6月号（164回）。「そばにいてほしい」（32枚）である。16歳の時の作品のようで、総合得点は51点である。

●聖子と真次は相思相愛の仲のはずだが、最近どうもシックリしないのだ。真次はバレーばかりで聖子にごぶさた、淋しいな。

〔評〕ひとりよがりの作品で、テーマのアプローチの仕方が完全に間違っている。次の事を考えてくれ。どうして聖子には真次が必要なのか。真次のどこが気に入っているのか。反対に真次には聖子のどこがいいのか。それらの理由をエピソードで描写すべきであった。2人の愛の歴史？や性格などのイメージも広げること。モノローグが多すぎる。登場人物が少ない。絵の面では人物のムードはいいのだが完成度が低いよ。

作品を読んではいないものの、初期の矢沢作品を思い出せば、ああ、と思うようなコメントである。添えられた投稿作品のイラストには「→人物の顔をはっきりと描こう。ムードに流れすぎた顔は、印象が弱いぞ。白い目も気になる。」とある。コメントによれば、ストーリーもあまりうまくないようだし、絵もあまり評価されてはいない。掲載されたものを見ても、授業中にささっと描かれた落書きのように思えてしまう。『Paradise Kiss』や『NANA』の絵に見慣れた目からは、同じ人物が描いたものには思えない。ただし得点を見ると、「ストーリー」は3～4点だが、「絵」の方は5～6点と高く、編集部には絵が評価されていたようである。さくらももこ（その姉も）、矢沢あいの絵を評価し、「矢沢あいぐらい／うまくないと、／少女漫画って／ムリなんだ……」（前掲）とつぶやいていたが、この時代にはマッチした絵だった、ということのようである。

※

次の入賞は1983年8月号（166回）の「煙草」（20枚）で、総合得点は54点。やはり「もうひと息賞」である。

〔評〕付き合っている男の子の心が、自分から離れていく。彼は口に出してはいわないが、街子にはわかるのだ。失恋する少女の気持ちを切々とダークなトーンで表現されている。少女の心理描写と暗いムードは、よい。しかし、2人のつきあいに具体性がない。男のキャラは全く描けてない。彼の気持ちも知りたいのだ。ラストは救いがなさすぎる。

投稿作品のイラストの下部には「↑いいムードでしょ。」とある。やはり絵が評価されているようだ。ヤンキー風の髪の子のセーラー服少女の前に男の手が伸びて、そこから煙草の煙が立ち上って、少女の顔半分を覆っている、という構図である。「りぼん」の少女漫画にしては、編集部のコメントにあるように、救いが無いストーリーのようだが、ペンネームに矢沢永吉の矢沢を借用している作者だけに、ヤンキー系の要素を取り入れたがっているようにも思える。

さくらももこと矢沢あいが、漫画スクールに同時に入賞することはなかったが、漫画版『ひとりずもう』の中で、矢沢あいが「また入賞してるっ!!」と書かれていたことを思うと、さくらももこが入賞する以前、また、ももこの姉が「「もうひと息賞」の／矢沢あいていう子」と言っていることからすると、この「煙草」のことを指していたように思える。「すごくうまかった。／「もうひと息賞」／じゃなくて、もっと／上の賞でも／いいと思った。」ともあるので、リアリティがあるが、この回に「お姉ちゃん…私の名前も／載ってるのに気づいてない／…Bクラスだもんね…」については、少々違和感もある。「夢の音色」（前掲）によれば、「きはら先生の表紙」の「りぼん」7月号で「さくらももこ」の名前がBクラスに載っているように描かれていたからだ。7月号には矢沢作品の入賞はない。ただ、いずれにしろ、さくらももこが、この頃の矢沢の絵を非常に高く評価していたことは確かなようである。



※

1983年9月号（167回）では総合得点63点で努力賞を取っている。「約束」（26枚）だ。誌面には「165・166回もうひと息賞」とあったが、「164・166」の間違いである。

●まゆみは矢沢永吉のコンサートの券を買いもらしてしまった。永ちゃんにぞっこんの彼女はひどく落胆していた。ところが友人の連次が余分な券を持っていて「一緒に行こう。約束やぞ」というのであった。願ってもない。まゆみは即座にオーケーしたが!?

〔評〕 前回「煙草」でもうひと息賞受賞のあい君であります。Cクラスから一段ずつ階段を登ってきて今回ついに努力賞受賞とあいなった。着実にうまくなってきていて、前回よりずっといいよ。主人公が前向きになってきた所がよい。お話がややドラマチックになってきた所もいい。

さて、この作品、後半はうまく描けているけど前半の人間関係がわかりづらく乗れない感じであった。恋敵の京子がどういう女の子で、主人公といかなる関係なのか理解できなかった。連次とまゆみとの、友情とも愛情ともつかないあやうい関係も明確に描写してほしかった。正確な表現を心がけること。後半の心理描写はイラストイメージとネーム共にうまい。まゆみの苦しい胸の内を矢沢永吉のテレビ画像で示すところは秀逸であった。ラストシーンもいい。ドラマの骨格をしっかり作ること!!

投稿作品のイラスト下部には「↑右上の絵はすごくいいでしょ。抜群のイラスト・イメージ。全体にはまだまだ絵が荒いよ。注意しよう。」とある。たしかに絵の構図はとてもよい。矢沢永吉のテレビ画像で胸の内を示すというのも、文字からしか想像できないが、なかなかいいアイデアであるように思える。「全体にまだまだ絵が荒いよ」というのも、掲載された数コマだけでも納得できるコメントだ。さくらもこの姉妹が矢沢あいの絵がうまい、と言ったとしたら、この絵（右上の絵）ではないか、という気もしてくる（窓際で連次と京子が仲よさそうに話している姿をまゆみが眺めているシーン。窓を見ているまゆみの後頭部描かれるが、後頭部を透過させて、その向こうにいる連次と京子を描いている）。

ところで、さくらや矢沢は、初回はBクラスやCクラスのランキングだったようだが、「りぼん」のバックナンバーを探しても、さくら・矢沢のペンネームを見つけることはできなかった。さくらの場合、最初の投稿でCクラスを取った際には、先述のとおり「さくらももこ」ではないペンネームを使ったとのことだが、どうも、ひとたび入賞するとペンネームを変える、ということが常態化していたように思われる。そして、一度入賞すると、たとえ総合得点が低くてもABCクラスに振り分けられることはなく、どこにも名前が載らないようにしていたようである（または古いペンネームで掲載される?）。というのも、さくらももこは169、171、172、176、178、179と入賞しているが、172と178の間が空きすぎているように思えるからだ。また、178回のコメントで、編集部は「ももこ作品を今までに7編読んだ」というのに、入賞は5回しかない（Bクラスだった1回を加えても6回）。172と178の間に、入賞を逃したボツ作品があるのではないだろうか（あるいは昔のペンネームでABCにランク付け?）。

また、矢沢の方も、170と174の間、また、175から182までの間が飛び過ぎている。ただ、167回のコメントに「Cクラスから一段ずつ階段を登ってきて」とあることを思うと、入賞7回に加えて、Cクラスで1回、Bクラスで1回、Aクラスで1回の計3回の投稿があったとも考えられるので、170から174、175から182までの間は、一種のスランプ的なものだったのかもしれない。

いずれにせよ、矢沢の場合もABCクラスに「矢沢あい」のペンネームを見つけ出せなかったことを思うと、一度、入賞するとペンネームを変えている可能性（あるいは入賞経験者はクラスに分けない）は高いように思う。このあたりは既に誰かがコミックスのおまけページにでも書いていることなのかもしれないが、今のところ確認できていない。

※

話を元に戻す。4回目の入賞は1983年12月（170回）で、総合得点66点の努力賞。タイトルは「今夜だけオール・ナイト」（32枚）である。

★第170回は佳作以上が出なかったが、投稿作品全体の水準は悪くなかった。努力賞は堂々と努力賞であったし、もうひと息賞も最近の中でははずば抜けて高得点のもうひと息賞である。批評をじっくり読んで、さらなる前進を期待する。

●（矢沢作品の粗筋）高校生の真利子は大学生の<sup>ボーイフレンド</sup>B・Fに捨てられたばかりである。失恋のけだるさをもてあますように、真利子は今ディスコの中にいる。音楽の洪水に身をまかせているのだ。偶然、アイツに出会う。とっさに、真利子は近くにいた男と店の外に飛び出してしまう。夜の町を歩く2人。彼も失恋していた。いつしか2人は“今夜は1人でいたくない”と思うようになっていた!?

〔評〕この作品はテーマも舞台もこれといって目新しくない。よくあるパターンである。内容的にも濃い作品ではなかった。しかし、実にのれて読めたのである。コマ運びやシーンのつなぎ方がてぎわよく、自然に作品の世界に引き込まれていた。音楽のように流れる展開であった。また、真利子の心象を大変巧みにお話の流れにのせている。強烈なエピソードはないのに、しっかりお話が盛り上がっているのだ。あい君は抜群のセンスの持主である。

絵の面では相変わらずイラスト・イメージが素晴らしい。構図の取り方もうまい。が、ペンタッチはひどく荒い。人物の描き分けもできていない。ムードも重んじた作品を描きたいのなら絵の力を徹底的につけること

ムードはあるのだが、キャラに魅力と性格が欠けていた。この欠点を克服すれば、あい漫画から傑作が誕生するぞ!!

また、投稿作品のイラスト下部には、次のような長いコメントが付せられている。「↑ラストシーンがキザっぽくて素敵だった。う〜んとうなってしまふようなカッコよさだった。あい君は前回はラストシーンをキザに決めていた。このセンスを大切にしてください。キャラに魅力がないのが、あい君の最大の欠点。格好いい男たち、素敵なお女たちを創り出してくれ。キャラができれば展開も新鮮になるはずだ!!」。

厳しいながらも、本質を突いたよいコメントであるように思う。投稿作品のイラストを見る限り、人物の線など、あまりうまいとは思えないが、構図がよいと思う。

「絵の力を徹底的につけること」は、『矢沢あいイラスト集 天使なんかじゃない』の「あとがき」に「原稿をかけば「絵がザツだ。かわいくない」と編集に言われ、カラーをぬれば「色のセンスがない」と友人にけなされ、絵に関してはコンプレックスのかたまりだった」と書いていたのが思い出される。

また「キャラに魅力と性格が欠けていた」というコメントは、「「天ない」製作秘話」（『天使なんかじゃない 完全版 1・4』2000年10月・12月・集英社）に、女性編集者のうーさんに「でも私 いつも／思うんだけど／矢沢さんの漫画って／男の子はいいんだけど／女の子のキャラに／全然魅力がないのよねえ」と言われたことから発奮して、『天使なんかじゃない』で「めっちゃ前向き」な冴島翠を生んだのだというエピソードが思い出される。藤本由香里が「進化する矢沢あい」（『Quick Japan vol.61 矢沢あいの時代 1985～2005』2005年8月・太田出版）で書いているとおりの。本人の言うとおりの、矢沢あいには「努力の人」（「らぶらぶ対談」）なのだろう。

※

1984年4月（174回）には、「すまいる・まじっく」（36枚）で3度目の努力賞。総合得点は65点。

●ケンは今全く青春していない高校生である。髪はボサボサで、ドテラをはおって学校にやってくる。面倒なことは一切しない。

怠惰と不精の代表選手である。そんな彼を殊勝にも想っている女の子・笑子がいる。髪を染め耳に穴をあけたツッパリ少女である

〔評〕あのY A Z A W A君が久々の登場です。170回努力賞の作品と比較すると完成度は若干落ちた。が、弱点であるキャラ作りに大きな進歩があった。ケンのキャラが楽しい。わずらわしいことが大嫌いという性格と、ダサイ格好をしたキャラデザインが共によかった。後半の笑子が突然泣きだすシーンは、潮が満ちるように感情が盛り上がった。圧巻である。問題点は、(イントロはよいが)前半が退屈なこと。せつかくのケンのキャラが、動いていない。怠惰なケンの楽しさを、エピソードで強烈に表現してほしい。また、主要登場人物がケンと笑子だけというのはあまりに考えがたりない。たまにはツッパリ以外にも挑戦を!!

投稿作品のイラストの下部には「↑迫力いっぱい絵が素晴らしい。デートシーンで笑子が突然、和服で出て来るのは、シャープでいいセンスだ。」とある。粗筋とコメント、4コマ分のイラストだけでは全体像が把握できないが、ツッパリ少女に和服を着せたり、突然泣きださせたりするなどの意外な展開が盛り込まれた作品らしく、そこがよかったと編集部が言うくらいなので、物語作りに大きな進展があったものと思われる。

※

翌月の1984年5月(175回)には、「片恋<sup>かたおもい</sup>白書」(30枚)が総合得点59点で「もうひと息賞」となっているが、編集部は全体に向けてのコメント「175回の作品批評を始める前にちょっと一言…」で、次のように書いている。

「175回の作品審査を通して、私たち編集部はちょっと考えさせられてしまった」。「今回の入賞はもうひと息賞10編である。その10編のうち6人までが数度の受賞歴を持ち、努力賞も受賞している。6人の才能を評価し、私たちは「期待」していたのである。が、なぜか、足踏み状態がつづいている。確実に上達してはいるが、何度も指摘した欠点を直せないでいるのだ。私達の批評に至らないところがあったのだろう(反省しよう)それにしても進歩が遅い。批評をもう一度読み直してほしい。欠点から目をそらさずに、立ち向かってほしい。克服する力はあるはずだ。あせらずに、質の良い作品を描くことです。▼じっくり考えてもらう意味で「問題の人々」を次の436Pでまとめて批評してみた。なお誌上批評には限界があるので、6人には担当編集者をつけた。がんばってください。」とある。

果たして次ページから始まる批評では、その冒頭に矢沢あいの「片恋白書」があがり、コメントの前には「さて、問題の人たちです。辛口批評でいくぞ。」とも書かれている。16歳の女子高生を相手にしているにしては、なかなか辛辣な言葉をストレートに投げかけている(ただし雑誌掲載時の年齢は17歳)。21世紀の今ならば、無報酬で、無理矢理に仕事をさせようとするブラック編集部、などと、twitterやらinstagramやらで炎上するかもしれない…

●透は単なるボーイフレンドなのだ

そうとわかっているけど、ゆう子は彼に会うと心ときめいて…!?

〔評〕あい君の欠点のストーリー性のなさと、キャラの個性のなさは今回も克服できてない。何回となく指摘したのにどうもうまくいかない。この失恋話は構成が単純すぎる。あい君は素敵なムード派だが、ムードによすぎるきらいがある。ここはひとつ路線を変えて、積極的な主人公のお話を描いてみたらどうだろう。一時ムード派からはなれて、元気いっぱいのお話を描くことをお勧めする。

投稿作品のイラスト下部には「↑今回は、絵の進歩があまりみられない。しっかりしたペンタッチで丁寧に描いてみよう。絵もムードに流れるな。」とある。サッカーボールを抱えた主人公らしき人物のイラストだが、

髪型からすると、サッカー少年であるよりは、ツッパリ系の少年であるように見える。さくらももこは、エッセイ漫画を脱却せよ、と編集部指摘されながらもエッセイ漫画を貫き、挙句には編集部コメントを撤回させていたが、矢沢も、なかなか頑固で「たまにはツッパリ以外にも挑戦を」という174回のコメントを無視している。これくらい頑固でなければ、一流にはなれない、ということなのかもしれない。

※

担当編集者がつきっきりで指導していたのか、矢沢の投稿はしばらくない（あるいは掲載されていないだけ？）。そして1984年12月（182回）に第17回りぼん新人漫画賞の発表があり、矢沢あい、「あの夏」（枚数は書かれていないが32枚）で佳作を受賞している。得点は掲載されていないが、選考にあたった一条ゆかり、池野恋、高橋由佳利のコメントが載っている。

●朋子の彼は高校生の風見君。少し翳があってシブイ雰囲気。中学生の朋子はそんな魅力にぞっこんですが…!?

★見せるってことを知ってる感じで、いい絵がいくつもあった。が、作者がムードに酔いすぎていて、男の描き方に冷静さを失っている。対象を冷静にみつめてほしいな。（一条）

★絵柄も個性的だしセンスも抜群！ 構図やムードの盛り上げ方もうまい。主人公のせつない気持ちがよく描かれている。「シブイ」あいさん、がんばれ（池野） ★会話が生々していてセンスが感じられる。女の子はよく描けている。（高橋）

コメント上部には矢沢の写真が載っており、吹き出しには「私 矢沢 BIGになります」とある。また総評には一条審査委員長の名前で、次のように書かれていた。「★今回もビデオは出なかったが、それぞれ個性的な作品で楽しく読めた。質的に前回は上回っている。とりわけ、矢沢さんのシャープさ、みずはらさんの堅実さに注目した。プロとしての活躍を期待します。」とある。掲載されているイラストは扉絵で、主人公・朋子（ショートカットで少し子どもっぽい設定）。扉絵にはないが、作品を読むと、風見君は高校生なのに煙草を吸い、バイクにまたがる存在で、いわゆる不良ではないにしても、「どっか／かげがあって／そこがまたかっこよかった／りして…」とされる存在、矢沢得意のツッパリ路線である（ここでも改めていない！）。

あまり表に出ない資料だと思われるので、同号に掲載された矢沢あいの「プロフィール紹介」も転載しておきたい。

●S42年3月7日生まれ。兵庫県在住。高3。B型。魚座。身長167cm。体重？ ●ペンネームの由来は／矢沢永吉さんを愛してまして…。●好きな漫画家／小椋冬美、高橋由佳利、くらもちふさこ先生。●努力賞3回、もうひと息賞3回と華々しい受賞歴だけど、スクールでの思い出話を／昔は漠然と描いていて、漫画家になろうとは考えていなかった

でも、去年スクーリングに出て俄然やる気になった。漫画仲間ができたせいか、互いに励まし合って真剣に描きました。受賞作は通算10作目の作品。●将来の希望は／いろんな分野に挑戦したいけど、根本的にはシブイ感じのお話が好きですね。●賞金20万円の使い途／半分以上貯金をしまして、漫画道具買って、服とか原付免許取得に使って、それから、えーと…!?

※

「あの夏」は、1985年『りぼんオリジナル早春の号』に掲載され、本作にてデビューを飾り、後に『15年目』（1986年7月）にも収録される。また、さくらももこと同じ『「りぼん」新人まんが傑作集【3】 虹を渡る7人』（1985年3月）にも掲載されており、ここでまた一条のコメントを受けている。

ラストは「矢沢あい」さん。今風の話は今風に描いてるって感じで、本人独自の個性ってなるとあんまり感じられないんだよね。いってしまえば、流行にうまく乗ってるって感じなんだけど、読者はうまくヒロインに感情移入できるんだろうね。死ぬの生きるのとまではいわなくても、ちゃんと恋愛のひとつもした人なら、この男がシブいだなんて思わないだろうけどね。少女の憧れの男としてはいいんだけど、私としてはもうひと押しちゃんと男を描いてほしいと思うな。だれが見てもいい男、やっぱめざすのはそれっきゃないと思うんだよね、矢沢さんの場合……。

手厳しいものの、言わんとすることはわかる気がする。しかし、わずか32枚で、斬新な恋愛漫画を、しかも娯楽としても楽しめるような形で提示せよ、というのは、なかなか困難だ。もちろん一条もわかっており、「作品解説」全体のしめくくり、次のように書いている。

と、まあ、いうのは簡単。いわれる方は大変なんだけど、これでお金をもらおうと思ったら大変なのはあたり前なんだから、世の中甘くないのだよ。それはこの私がいちばん知っているんだから。もうがんばっておくれとしかいいようがないな。しかし——こんな好きなこと書いて、そのうち彼女たちが一流になって、あの時一条さんにこんなこと書かれたっていわれやしないかと思うとおそろしい。

口は災いの元、どうぞ、おてやわらかに——。

※

さて、最後に矢沢作品がどのように採点されていたかを振り返ってみたい。

タイトル	絵			ストーリー			センス	総合
	キャラ <sub>1</sub>	構図	表現力	キャラ <sub>2</sub>	ネーム	ストー <sub>3</sub>		
そばにいてほしい	6	5	5	3	4	3	25	51
煙草	6	5	4	5	5	4	25	54
約束	5	6	5	5	5	5	32	63
今夜だけオール・ナイト	5	5	5	5	7	6	33	66
すまいる・まじっく	6	6	5	5	5	4	34	65
片恋白書	6	6	6	4	6	4	27	59
あの夏								

1 キャラクターの顔等の魅力、2 キャラクターの性格等の魅力、3 ストーリー

絵や構図についてのセンスは初期から評価され（しかし、あまり数値に変化がないということは、うまくなっていないのだとも言える）、問題であったキャラの性格やストーリーについては、だんだんと上がっていつてデビューにつながっているように感じられる。

ただ、先にも記したように、さくらももこと同じく、編集部のコメントでツッパリ路線を変えろと言われても矢沢は変えていない。変えなかったのか、変えられなかったのか、そのあたりはわからないものの、1990年代の「りぼん」を支えた2人に共通した傾向として頑固さがあつたことは興味深い。矢沢の場合、『NANA』に至るまで、ツッパリ路線は変わっていない（ただしヒロインに関しては、翠、マリリン、紫、ハチなど、必ずしもツッパリ系とは言えない）。

編集部は多くの先例を見ながら、作家に寄り添い、時に突き放しながらも真摯な指導をしているとは思ふ。しかし、編集部のコメントを裏切ったからこそ『ちびまる子ちゃん』や『NANA』が成立したということは、記憶しておくべきであろう。

それにしても、さくらももこは53歳にして病没。矢沢あいは、2009年から体調不良のために『NANA』を休載中であり、もはや10年ほど漫画を描いていない。日曜18時の定番番組、国民的番組となった『ちびまる子ちゃん』と、やはり国民的な支持があったとも言える『NANA』の作者が、2019年の今、現役として活躍していないということはなんとも悲しいことである。

## 吉住 渉

矢沢あいと仲の良い吉住だが、「ラブラブ対談」では、仲よくなったきっかけについて次のように書かれている。

——矢沢先生と吉住先生が仲よくなったきっかけは？

**矢沢** 最初に会ったのは、『りぼん』のパーティーの時やっけ？

**吉住** そうそう。それで私のしめきりの時に、あいちゃんが1回手伝いに来てくれて…。

**矢沢** それで妙に意気投合して。だからここ5年くらいかな。仲いいの。ただ、お互い仕事で忙しいから、あんまり会ったりはできんね。

**吉住** うん。月に1回か2回、電話はするけど。

**矢沢** でも、その1回が5時間（笑）。密度が濃い。

漫画家になるきっかけについては、同対談で次のように書かれている。

**吉住** 私は、単にマンガがかきたかったから。でも、けっこう受験校に通ってたので、大学に入るまではマンガかけなかった。

**矢沢** 某一流大学やもんね。なんたって。

**吉住** マンガって大きな原稿用紙にインクでかくでしょ？ 親に隠れてできないの。で、大学に入ったらやろうと思ってて。ちっちゃいころ『りぼん』で活躍してたのが田渕由美子先生で、大学生やりながら学園ものかいてるっていう、そういうのに私もあこがれてた。だから、マンガ家だけになるっていうよりは、大学行きながらマンガかくとか、ほかの仕事しながらマンガをかくっていうのがやりたかったのね。それで、ペンでちゃんとマンガをかいて投稿したのは、大学入ってから。まあ、たった1回しか投稿してないんだけど。

吉住が通っていた高校は、筑波大学附属高校（inter-eduによれば、2018年の東大合格者38人で全国ベスト14）。そして大学は一橋大学経済学部（Benesseマナビジョンによれば偏差値75）。デビュー作の「ラディカル・ロマンス」は、学生結婚したカップルの夫婦喧嘩と和解の物語だが、さりげなく背景に一橋大学の兼松講堂が描かれてもいる。1963年6月生まれの吉住だが、一橋大学卒業後はNECに入社し、二足の草鞋を履きながら漫画家生活をしたが、すぐに退職。田渕由美子は早稲田大学文学部に在学しながら漫画を描いていたが、頭の中には、そのモデルがあったのだろう。

矢沢との対談でも語っているように、矢沢が感情派であるのに対して吉住は理論派。10回の投稿でCランクからこつこつと新人漫画賞を受賞した矢沢と、1回きりの投稿で新人漫画賞を受賞する吉住も好対照である。

※

第16回のりぼん新人漫画賞発表の際の編集部コメントには「今回の応募総数は例年通りであったが、質的にはいま一歩であった。とび抜けた作品もなく、全体的にも低調であった。」とあり、一条は「衝撃的な傑作はなかったけど、受賞した方たちは全員素晴らしい才能を持っていると思う。吉住さんの構成力。海岡さんのセンスあふれるムード。しゅみさんのクラシックな絵などである。才能を生かすか殺すかはこれからの努力しだ

い。担当者がうんざりするほどネームを作ること。がんばれ。」と書いている。小田空と太刀掛秀子によるコメントも、吉住を佳作にするのが不服なのかと疑うようなものだ。得点の表記はなし。編集部からのコメントも特に掲載されていない。

●裕記が帰宅すると自分の部屋に、7年前の彼自身がいた。7年前の裕記はタイムスリップしてこの時代に来たという。ひとつの時代に2人の裕記、さてどうしたものでしょう!?

〔評〕★絵はかわいくて見やすく、話の展開もスムーズでわかりやすかった。話のイントロはまあまあだが、その後が感心しない。強烈にアピールするものもなかったよ。(小田)

★絵はクールですてきな絵柄である。男の子がかわいい。バックは描き込み不足。作品の狙いはいいと思う。(太刀掛)

※

受賞作の「One Day...?」は、公に発表されることがなかったようで、デビュー作は「ラディカル・ロマンス」(『りぼんオリジナル』1984年初夏の号)。同作は『ハンサムな彼女8』(1992年1月)に掲載されているが、さくらもこや矢沢あいと同じく『「りぼん」新人まんが傑作集【3】 虹を渡る7人』(1985年3月)に先に掲載され、ここでまた一条のコメントを受けている。

さてと、「吉住渉」さん。この人はむずかしいよ。これがひどいってとこもないかわりに、これだー！っていうとこもない。無難でけっこううまい絵に、それなりの話がついていて、構成とかもしっかりはしてんだよね。うまくやってますって感じで、本人の思い込みとか、どーしてもこれが描きたかったんだって風なパワーが感じられない。そりゃたしかに漫画ってのは頭で考えるんだけど、うわつつらをなめるんじゃないって、読者もいっしょにのめり込みたいんだよね。

絵の拙さはあるものの、内容も構成もきちんとしており、吉住の場合、デビュー後の諸作品、ヒット作である『ハンサムな彼女』や『ママレード・ボーイ』などとの差がほとんどないようにも感じられた。本人の資質によるところが大きいにしても、さくらや矢沢が10代でデビューしたのに比べて、吉住は20歳・大学生での初投稿でデビュー。恋愛観や人生観には、この1年、2年の差が非常に大きいのではないだろうか。ただ、その新人らしくない老成された感じを、一条や小田、太刀掛からも危惧したのかもしれない。本稿の「はじめに」では、さくら・矢沢・吉住が「どのように成長を遂げていったかを見ていくことにしたい」と書いたが、吉住に関しては、最初から成長していた、ということのようだ。

しかし、2018年11月に『ママレード・ボーイlittle』の連載を終了するまで、「りぼん」「マーガレット」「コーラス」「cocohana」といった集英社の雑誌にコンスタントに連載を続け、さくらや矢沢のような国民的と言えるほどのヒットはないにせよ、どれも人気のうちに連載を終了させているということは特筆すべきことだと思われる。

それにしても、「りぼん」黄金期とも言える1990年代の漫画家たちのデビューまでの努力、そしてその後の活躍を考えた際、短く花開いたさくら、そして矢沢。一方、国民的ヒットはないにしても、たった1回の投稿でデビューし、その後もコンスタントにヒット作を放ち続けている吉住… いろいろ考えさせられる。ともあれ、今は矢沢あいの復活と、吉住渉のさらなる活躍に期待して、擱筆することとしたい。